# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 106

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

# 目次

2101. 科学と哲学の両極

2102. 崩壊と寒さ

2103. 「醜美」な夢

2104. 能力測定とトレンド除去変動解析に関する夢

2105. 「デジタルラーニングと学習環境」の初回のクラス

2106. 呼吸を用いた遊び

2107. ライフワーク

2108. 永遠に向かう魂の衝動

2109. 複数の実践領域の越境

2110. 身体を通じた学習

2111. 研究インターン二日目の朝

2112. インターン二日目の始まり

2113. 来週のインターンに向けて

2114. 週末の始まり

2115. 精神病理学への関心の高まり

2116. 愚昧さへの憤怒

2117. 破壊と創造の輪廻

2118. 自己の精神性の未熟さと精神病理への関心

2119. 交差

2120. アーネスト・ベッカーの一連の書籍

© YOHEI KATO 2019

## 2101. 科学と哲学の両極

今日も昨日に引き続き、早朝から晴れ間が見える。柔らかな冬の青空を見ることが、これほどまでに自分の心を落ち着けるのだということを改めて思う。

遠くの空はほのかな紫色を発している。早朝の青空を眺めると、一羽の鳥が優雅に舞っていた。飛ぶ鳥のさらに奥を眺めると、空の中にぽつりと半月が浮かんでいる姿が見えた。早朝の半月は静かにそこにたたずんでおり、太陽とは違ったものをこの地球に届けている。

半月の波動のようなものを感じたことはあるだろうか。半月を凝視していると、欠けている場所を補うかのように、それが満月であるかのような錯覚を覚えた。そして、その半月はモナリザの絵画作品のように思えてきた。

昨年の夏にルーブル美術館で見たモナリザの微笑みが発するあの何とも言えない波動。それと同じような波動が、半月からこちらに向かって届けられている。

いつもと同じように学術研究の仕事を始めようとした時、自分にとって科学論文ばかり読むことはあまり好ましくないと思われた。端的に述べれば、科学論文という一つの物語で用いられる素材とストーリーの構築方法に退屈さを感じることがある。それは特に科学論文だけを読み続けている時に起こる事柄である。こうしたことと関係して、私はできるだけ科学の領域だけに留まることのないように日々を送っているのかもしれない。それは日本企業との協働プロジェクトであったり、作曲であったりと、様々な形を取る。学術研究においても、科学領域だけではなく、哲学領域の探究も進めていこうとする意思の背後には、一つの領域だけに留まっておくことを自らに許さない何かがあるのだろう。

これまでの学術研究を振り返ると、確かに科学と哲学の領域を行ったり来たりしている自分がいることに気づく。現在所属しているフローニンゲン大学は、人間の発達現象をもっぱら科学的な観点で探究していくことを前面に出している。そうした環境で研究を進めることによって得られたことは計り知れず、特に科学的な発想の枠組みと手法を用いて人間発達に迫ることができるようになりつつあるのも、この大学に所属しているからこそだろう。

© YOHEI KATO 2019

一方で、人間発達を哲学的な観点から研究していくことに関しては、自ら行っていく必要がある。フローニンゲン大学の哲学科は、欧州の大学の中でも質の高い研究を行っているそうだが、私は哲学科に所属しているわけではないし、人間発達という観点を哲学的に探究している教授はここにはそれほどいないという印象を持っている。そうしたことから、哲学的に人間発達を探究していくことは自らが率先して行っていく必要がある。

仮に秋から米国の大学院に籍を移すことになれば、そこでは科学・哲学の両側面から人間発達を探究できるであろうという期待がある。秋からは、科学と哲学という両極をこれまで以上に激しく行き来し、それらが一つの大きな極に収斂していくのではないかと思っている。フローニンゲン：2018/2/6（火）08:41

No.730: Lustrous Days

I’ve recently perceived my days to be luminous. Our days are very irradiant. Groningen, 07:52, Friday, 2/9/2018

## 2102. 崩壊と寒さ

今日も静かに一日が終わりに近づいている。ここ最近は就寝の一時間前に日記を書くことはほとんどなかったが、今日は日中に日記を書き留めることがなかったので今このようにして今日の振り返りをしている。

今日は午前中にある企業との協働プロジェクトのミーティングを行った。こちらのプロジェクトは順調に進んでおり、三月末で一つのプログラムとして世に送り出されることになるだろう。

二時間半ほどの打ち合わせをした後に、ベートーヴェンの精神性の発達に関する専門書を読んでいた。先週あたりから少しずつ読み進めていたこともあり、今日で全てを読み終えることができた。本書は発達研究者が執筆したものでは決してないのだが、発達理論と密接に関係している記述が随所にあり、ベートーヴェンのみならず、作曲家の精神的な発達を考察する上で非常に有益である。おそらく今後また読み返すことになるだろう。

夕方からは、髪を切りに街の中心部に出かけた。道中、これまでお世話になっていた美容師のロダニムが燃え尽き症候群から一向に回復する様子がなく、それが非常に気に掛かっていた。彼はとても気さくな美容師であり、サービス精神も旺盛で、お世話になる時は毎回会話に花が咲いていたこともあり、彼の復帰を長らく待っているのだが、もう半年近く彼は仕事から離れている。

昨夜、ここ最近の仮想通貨を取り巻く状況を眺めてみた時に、1980年代終わりのバブル崩壊のことが頭をよぎった。バブル崩壊後、30年近く経ってもあの当時の日経平均株価を超えることは未だかつてないように思われる。一度崩壊したものは、以前の状態に戻ることはとても難しい。それは経済現象のみならず、人間の精神にも当てはまることなのかもしれない。

髪を切り終え、帰り際に行きつけのチーズ屋に立ち寄った。いつも通り店主と雑談をしている時に、「ここ最近は特に寒い」と私が述べると、店主は笑いながら、「オランダ人にしてみればこれは普通だ」と述べた。

今外気はマイナス3度だが、夕方もすでにマイナスの気温になっていたように思われる。チーズ屋を出た時に、やはり外の気温が寒かったので、私は小走りで自宅まで帰った。

ここ最近、外出する時には、ランニング専用の靴では決してないのだが、最初の数分間を小走りして体を温めるようにしている。明後日の朝、インターンのオフィスに行く時も小走りをすることになりそうだ。フローニンゲン：2018/2/6（火）21:16

No.731: Arts and Science in Music Composition

I'll emphasize the importance of both artistic and scientific aspects of music composition. Lack of either one does not stimulate my existence. Both aspects augment my exploration and practice of music composition.

I'll continue music composition in an artistic and scientific way as possible as I can. Both of them are not incompatible but interdependent. Groningen, 08:04, Friday, 2/9/2018

## 2103.「醜美」な夢

今朝方の夢の印象が強く残っている。とりわけ二つの場面の記憶が強く残っており、その印象が強かったためか、どちらの夢も場面が切り替わるところで一度目を覚ます形となった。

最初の夢の場面では、それほど親しくはなかったが、付き合いの長い友人の家に遊びに行くというものだった。妹と母と友人の本人を含め、彼は三人で小さな家で生活を営んでいる。

彼の家に遊びに行った時、彼と私は外で運動をしていたためか、汗を流すために私はシャワーを借りることになった。シャワー室に行ってみると、そこはトイレと一体となっていた。それは全く問題ではなかったのだが、トイレとシャワーがあまりにも汚すぎて、私は相当に驚いた。その光景を思い出したくないほどに、トイレとシャワーは汚く、その場から早く逃げ出したい気持ちでいっぱいであった。

この家の外観からはあまりわからなかったのだが、実際には築何十年も経っている家らしく、過去から現在にかけて一度もトイレとシャワーが掃除されたことがないかのようであった。端的に述べれば、汚物にまみれたトイレとシャワーがそこにあったのである。

結局私は、そこでシャワーを浴びることをせず、その場から離れた。すると、友人と顔を合わせたので、「トイレとシャワーを一度掃除した方がいいのではないか？」と私は述べた。それに対して友人は、「そうするつもりだ」と述べた。友人はそれに加えて、新しいトイレとシャワーを購入する予定であるとも述べた。本当にそうした方がいいと私は思った。

結局シャワーを浴びることができなくて少々困ったが、その一戸建ての小さな家が大きなアパートの一室となり、どうやらそのアパートの一室にはお風呂を貸してくれる場所があるらしい。その家主は韓国人のようだ。

私はその韓国人の家主のところに向かった。先ほどの友人の家とは異なり、その家主の家はとても綺麗であった。玄関で事情を説明し、早速お風呂を借りれることになった。

私は一安心し、玄関から家の中に入ると、家主の家族が一人いた。家主は中年男性であり、そこにいたもう一人の家族らしき人物は初老の男性だった。その初老の男性に私は簡単に挨拶をした。

お風呂場に到着すると、それまで英語で会話をしていた家主が突然日本語を話し始めた。その日本語は比較的流暢であり、「どこで日本語を習得したのか？」と私は尋ねた。すると家主は、お風呂場の反対側にある部屋を指差し、部屋の本棚に並べられている大量の日本の漫画から日本語を学んだと述べた。特にこの八ヶ月間は集中的に漫画を読んでいたそうだ。わずか八ヶ月間漫画を読むだけでここまで日本語を習得できるのかと驚かされた。

漫画だけから学んだとしても、家主の日本語はおかしな表現はほとんどなく、普通に私との会話が成立していた。お風呂場で家主としばらく会話をした後、家主は去り、私はお風呂場のドアを開けた。するとそこには、先ほどの汚物にまみれたシャワー室とは打って変わって、とても清潔な風呂場があった。浴槽に張ってある湯も透明で非常に綺麗であった。

お風呂場に足を踏み入れたところで夢の場面が変わった。フローニンゲン：2018/2/7（水）07:23

No.732: Bartok's Mikrokosmos

I was quite surprised by Bartok's Mikrokosmos; how educational it is. This is basically written for a beginner pianist. However, I think that this is tremendously valuable for a novice composer. I'll closely scrutinize each piece of work to learn composition skills. My encounter to Bartok's Mikrokosmos is quite fortuitous. Groningen, 08:44, Friday, 2/9/2018

## 2104. 能力測定とトレンド除去変動解析に関する夢

起床直後の外気の温度はマイナス4度であった。今は少し気温が上がりつつある。

気温がマイナスの世界に足を踏み入れた時には大抵、道路の轍を除いた部分が白くなっている。今朝も起床直後にその光景を目にした。

今朝方見ていたもう一つの夢についても書き留めておきたい。夢の中で私は、一台のバスに揺られながらどこかに向かっていた。どこかとは、おそらく旅館か何かではないかと思う。

バスの中には日本人と韓国人しかいなかった。私は大学時代のゼミの友人たちと旅をしているようであり、バスの中には彼らもいた。しかし、彼らは私の隣にいたわけではなく、皆がバラバラな席に

腰掛けている。バスの後方から一人の友人が大きな声を上げ、「トレンド除去変動解析について教えて欲しい」と私に向かって叫んだ。この手法は非線形ダイナミクスの分析手法の一つであり、昨年から私も研究でよく使っているものだ。

友人の質問は当然日本語だったのだが、バスの中にいた韓国人たちもなぜだか一様にその手法に関心を持ったようだった。全員の視線が私に向かった瞬間に、バスが大きな会議室に変わった。

会議室には、バスに乗っていた全員がそのままそこにいたように思う。バスから会議室への変容と共に、文脈も変容しているようだった。

一人の韓国人女性が、パフォーマンス測定の方法について発表をしている。彼女の発表の要旨は、パフォーマンスに関するデータをもとにその人物の能力を評価していくというものだった。とても明快な論旨であるが、その横にいた一人の韓国人男性は反論を投げかけた。彼の主張の要旨は、データだけを積み上げても能力の評価などできず、パフォーマンスの判断は直感的に行う方がいいのではないか、というものだった。

二人の主張を全て聞き終えたところで、私が意見を述べた。実は二人の主張はそれぞれ正しいものを持っているのと同時に、各々固有の限界を内包していることを指摘した。彼ら二人が議論していることは、心理統計学の領域ではかなり古典的なテーマであるゆえに、二人の対立する主張を統合する意見を述べることは比較的容易であった。

私が口を開き始めると、会議室にいた全員が私の言葉に耳を傾けている。私はかなりゆっくりとした英語を話しており、淡々と説明を続けた。各々の主張の正しさと限界を丁寧に一つ一つ説明し、統合的な主張を打ち出した。しかし、統合的な主張を打ち出しただけでは物足りなかったので、統合的な主張に含まれている課題すらも指摘し、ではその課題をどのようにすれば乗り越えていくことができるのかの案もいくつか示した。

ゆっくりと説明したにもかかわらず、私が提示した統合的な主張に含まれる限界とその限界を乗り越えるための専門的な手法に関する話まで付いてくることのできた人は皆無であった。

会議室全体が少しばかり静かになると、友人が日本語で「トレンド除去変動解析」について再度質問をしてきた。私はその質問に対して、今度はホワイボードを使いながら説明を始めた。グラフを描いたり、ポイントになる言葉をホワイトボードに書き出しながら、私は今度は日本語で一気呵成に説明を行った。質問をしてくれた友人もその手法の本質部分は理解したようだった。

ただし、説明を終えた私は、その手法について自分でもまだ理解が及んでいない箇所がいくつかあることに気づいていた。そうした気づきを得たところで夢から覚めた。フローニンゲン：2018/2/7（水）07:58

No.733: The Second Day for My Internship

Today is the second day for my internship. I'll move forward my research, following the schedule that I made last Monday.

I hope to finalize quantification criteria today. Once I finish it, I'll format the data sets in order to conduct data analysis. Groningen, 08:49, Friday, 2/9/2018

## 2105.「デジタルラーニングと学習環境」の初回のクラス

今朝も青空が広がる、清々しい朝を迎えた。そこにはあの鬱蒼とした寒々とした空はなく、ほのかに青みを帯びた澄み渡る空がある。そうした空の中で、半月がひときわ美しく光を放っている。華美な輝きではなく、上品な輝き。薄青色の空に、白銀色の輝きを身にまとった半月を私はしばらくぼんやりと眺めていた。

今日は午前中に「デジタルラーニングと学習環境」のコースの初回のクラスに参加した。このコースは、私の研究アドバイザーであるミヒャエル・ツショル教授が担当するものであり、近年耳にすることが多くなった「ビッグデータ」や「AI」などを含め、デジタル技術と教育実践を扱う内容のコースである。また、教育実践のみならず、フローニンゲン大学の教育科学学科の理念でもある「教育研究」という点にも強い焦点が当てられている。単純に、デジタル技術をどのように活用すればより良い教育を提供できるのかを考えていくのではなく、デジタル技術を活用した教育研究をどのように発展さ

せていけるのか、そしてデジタル技術を媒介とした教育実践と教育研究との相互作用をいかに育んでいけるのかにコースの主眼が当てられていると言っても過言ではない。

今日のクラスは、最初の学期に履修していた「学習理論と教授法」のコースが行われていた教室で開催されることになっていた。自宅を出発し、教室に向かっている最中、ツショル教授のコースがフローニンゲン大学で私が履修する最後のコースになるだろう、ということにふと気づかされた。

最後の学期は論文の執筆のみに専念することがスケジュール上決まっており、何か特定のコースを履修することは今学期で最後になる。その最後のコースが、私のアドバイザーのコースであることにやはり何かの縁や意味があるのかもしれない。

思い返してみると、二年前の九月に、以前のプログラムのコーディネーターであるルート・ハータイ教授の「タレントディベロップメントと創造性」というコースを履修することからフローニンゲン大学での学術生活が始まった。今こうして最後のコースが始まろうとしていることに対して、感慨深いものを感じる。そのようなことを思いながら教室に到着した。

教室に到着すると、ツショル教授はもう授業の準備を完了しており、教室の一番前に座っていた。私は挨拶に行き、「今日からのクラスを楽しみにしている」と述べた。

この日記ではあえて彼のことを「ツショル教授」と表記しているが、普段はより気楽に「ミヘル」と呼んでいる。

今日はコースの概略を説明する回のため、理論的な説明はほとんどなかったが、コースの途中で扱った、「ヴァーチャルリアリティーと学習」の話題、そして「アフォーダンス」の話題が印象に残っている。そのあたりについてはコースの進行に応じて、考えたことを今後書き留めておきたい。

今日のクラスを通じて一つ驚いたことがある。ツショル教授のことを、これまでてっきりオランダ人だと思い込んでいたのだが、どうもそうではないらしいのだ。クラスの中でツショル教授が「最終試験の解答は英語でもオランダ語でもどちらでもいいです。私はオランダ語をあまり話せませんが、読むことならできます」と述べていたことからも、ツショル教授はオランダ人ではなく、別の国籍を持っていることを今さらながら知った。

教育科学学科の長を務めるダニー・コストンス教授から以前、ツショル教授の祖先はイタリア人であるらしいという話を聞いたことを思い出した。ただし、ツショル教授の英語にはイタリア語訛りが一切ないため、次回の研究ミーティングの際にさりげなく実際の国籍を尋ねてみたい。

クラス終了後、第三回目までの課題論文を印刷した。本来であればコースの開始前に全ての論文を一読したかったのだが、文献の一覧表がアップロードされたのは昨日のことであるから仕方ない。今日から早速課題論文を読み進めていく。「デジタルラーニング」は自分の研究と密接に関係しているだけに、課題論文を読むことが楽しみでしょうがない。フローニンゲン：2018/2/7（水）15:38

No.734: Progress of My Internship

I finished today's planned tasks in the morning. Because I have sufficient time in the rest of the day, I'll work on data preparation. In particular, I'll format data sets of lectures and online comments. Even if I can complete formatting only the data of lectures, it would be fine.

I have a meeting with my supervisor at 14:00. I'll then tackle the data preparation. Groningen, 13:26, Friday, 2/9/2018

## 2106. 呼吸を用いた遊び

昨日ふと気付いたのだが、私は自分の呼吸に意識的に介入するような遊びに興じていることがよくある。これは呼吸に意識を向け、できるだけゆっくりと呼吸をするような遊びである。より詳細には、呼吸をできるだけゆっくりさせた時に、自分の心拍数や脳の働きを観察するような遊びである。

呼吸の速度を変えると面白いぐらいに脳と身体の状態が変化していく。これは私にとって非常に面白い現象であり、ふと気付いた時に、場所に関係なくこの遊びに興じることがある。昨日も書斎にいる時にこれを行なっていた。また、いつも意識的に行っているのは睡眠前の時間である。

毎晩、入眠前にベッドの上で仰向けになりながら、できるだけゆっくりとした呼吸を行い、自分の心拍数と脳波の速度を落とせるだけ落とす。これが何の役に立つのか定かではないが、心が落ち着くことは確かである。こうしたことを日常の隙間時間に行っている自分がおり、気がつけばこうした実

践を行っていない場合においても、私の呼吸は人よりも随分とゆったりとしたものになっていると思う。

時折他者の呼吸の速度を観察することがあるが、大抵私の呼吸の方が多くの人よりも三倍ぐらい速度が遅い。私が一回ほど吸って吐くを行っている時に、多くの人は三回ほどの呼吸を行っているようなのだ。

昨夜ふと呼吸について意識が向かい、呼吸に介入する実験についてはまた新たな仮説をいくつか持って、日々遊びのような感覚で検証実験を繰り返していこうと思う。

今日は昼食前に大学から自宅に戻り、午後からは「デジタルラーニングと学習環境」のコースで課題として取り上げられている書籍を読み進めていた。研究と実務の双方からオンライン学習を扱っているため、この分野については関心が非常に高く、課題図書を一気に読み進めていった。全部で六章ほどが課題として取り上げられており、夕方までに四章を読み終えた。就寝までまだ時間が十分にあるため、これから残りの章を読むことができそうである。明日は第三回目のクラスで扱われる二本の論文にも目を通すことができそうだ。

先ほど書籍の四章分を読んだ時、私はこれまでの自分が提供してきたオンライン学習を必然的に見直すことになった。コンテンツの内容というよりも、コンテンツの届け方、つまり学習者がコンテンツとどのように接するのかという方法について、改善の余地が多分にあることに気づく。

今読み進めている書籍には、デジタルラーニングのコンテンツ制作に関して六つの原理が紹介されており、一つの章に一つの原理の解説が施されている。一つ一つの原理の裏にある理論とその原理に対する実証研究を紹介しながら、どのようにすれば学習者にとって学習効果の高いコンテンツ制作とコンテンツ提供ができるかが丁寧に説明されている。紹介されている内容はすぐにでも今後のオンライン学習に取り入れていきたいと思うし、オンライン学習に関するコンサルティングにも非常に活きてくるだろうと思われる。

本当に何をやっても何を学んでも、日々が新たな発見で満たされている。フローニンゲン：2018/2/7（水）20:47

No.735: Brainstorming Meeting

I had a meeting with one of my supervisors in the afternoon. This meeting was very beneficial for me to clarify my ideas. Especially, I could have a clear idea of what kind of hypotheses I have and what kind of data I need in order to test the hypotheses.

So far, one hypothesis is that a lecture with a high completion ratio is likely to have a specific variability type (e.g., “pink noise”). Another hypothesis would be that a lecture with more comments shows a specific variability type.

One of the practical implications of this data analysis would be that I could detect, for instance, the optimal range of the number of content related words in one lecture video. It means that content developers can optimize lectures in order to make them more educationally effective (e.g., achieving a higher completion ratio, attaining more active engagement with the course such as more online comments, etc.). If possible, I’ll interview one or two lecturers about the characteristics of a good lecture. Groningen, 17:20, Friday, 2/9/2018

## 2107. ライフワーク

時刻は早朝の六時半を迎え、今の気温はマイナス四度である。室内は寒さをそれほど感じることはない。

朝方何度か目を覚ますことがあった。その原因はどうやら夢のようだった。悪い夢を見ていたわけでは決してないのだが、一つの夢の場面が切り替わるたびに目を覚ますことになった。あるいは、夢が重要な局面に進展していくその前に目覚めるということが起こっていたと言える。

自分が夢から滑り落ちたのか、はたまた夢が自分から滑り落ちたのか、そのあたりは定かではない。私が夢の深みに入ることを拒絶したのだろうか、それとも夢がそれを私に許可することを拒絶したのだろうか。

夢の中で何をしていたのかは断片的に覚えているのだが、それらは何か一つのまとまりとして意味を持つものではなく、断片を言葉で描写していくことは難しい。仮に夢日記を書くにしても、夢で生

じていた事柄を単に列挙するようなことは気乗りがしない。やはり、夢の中の出来事から自分なりに意味を汲み取り、そうした意味の総体をもってして夢を記録したいという思いがある。

確かに私の日々は、人間存在に関するメモを取ることで形作られているが、そのメモは現象の外観を単になぞるだけのものであってはならない。そうしたことを行っていても意味はほとんどない。現象の外観記述から出発したとしても、そこに必ず固有の意味を見出し、それを書き留めておく必要がある。

今朝方見ていた夢に関しては、外観記述から固有の意味を抽出・創出することが難しいため、今朝の夢については書き留めることをしないことが賢明のようだ。

ここ最近、ふとした時に人間存在に関するメモを残すことについて考えることが多くなった。自分でもまさかそれが自分のライフワークであることなど思ってもみなかったことである。

昨日はライフワークと一般的な仕事、つまり金銭的な報酬を得ることに関係した仕事との相違点を考えていた。そして、果たして今の自分の日々の取り組みは、本当に全てライフワークに関係したものなのかを改めて考えていた。

確かに生活をするためにしなければならない仕事は存在するのだろうが、今後は少しずつそうした仕事を自分の中で減らしていきたいと思う。日々の一挙手一投足が、全て自らのライフワークに根ざされたものである必要がある。そこに充実感と幸福感をもたらすカギがある。今日これから行うことの一つ一つが、自分のライフワークとどれだけ密接に関係しているのかを精査し、日常の全ての営みをライフワークから生み出されるものとしたい。フローニンゲン：2018/2/8（木）06:56

No.736: Toward the Third Day

I plan to format the data next week. It is the first task to do. In the first place, I'll just focus on the data of lectures because I need to specify what kind of characteristics lectures have. More specifically, I should detect variability types of lectures before delving into learners' online comments.

Once I format the data and conduct analysis—detrended fluctuation analysis with R—, I'll do the second analysis on the relationship between the variability types and a completion ratio (or/and the number of online comments). Groningen, 17:32, Friday, 2/9/2018

## 2108. 永遠に向かう魂の衝動

時刻は七時を迎えたが、辺りはまだ闇に包まれている。ふと昨日の夕方のことを思い出した。

昨日の夕方、数百匹の鳥の大群が自己組織化の隊列を成しながら遠方の空を飛んでいる光景を目撃した。その隊列の動きは、大きな波のようであり実に見事であった。数百匹の鳥たちはいくつかの隊列を作っており、それが動いていく様子は、さながら大海の波のようであった。

机に向かっている時に、書斎の窓からその様子が視界に入り、私はすぐさま窓際に駆けつけて、その鳥の大群の動きをずっと眺めていた。鳥たちが遠方の空彼方にいなくなるまで、私はずっと彼らの動きに釘付けになっていた。鳥たちの姿がもう見えなくなったところで、私は再度フローニンゲンの夕方の空を仰ぎ見た。

昨日は本当に素晴らしい爽快な青空が広がっていた。線香花火のような飛行雲、何層にもわたって色のグラデーションを変えている青空、そしてその青空の向こうに見える夕日。それらの全てが静かに私を捉えていた。

欧州での生活も一年半を過ぎると、本当に欧州での生活が板についてくる。それは単純に物理的な生活面のみについて述べているわけではなく、それよりもむしろ精神的な生活についての話である。

欧州での生活が二年目を迎えてみると、私は精神的な葛藤を一度も経験していないのではないかと思う。初めて欧州での生活を営んだ一昨年とは随分と様子が違う。

精神的な葛藤というのは、確かに内面的な成熟をもたらすために不可欠なものであるが、葛藤と対極にある安定性というのもまた、さらなる内的成熟に不可欠なものであることは確かだろう。

葛藤があり、それを乗り越えた後には精神の安らぎがある。しばらく安定的な精神生活が営まれることによって、次の葛藤に向かっていくための胆力が醸成される。それが人間の内面的発達のプロセスだろう。

どうやら現在の私は、精神の安らぎの真っ只中にいるようだ。そのため、日々の生活が静かに平穏に営まれていくのだろう。

私の中で欧州での生活は一旦二年で区切りを付け、再び米国に戻ろうとしているのはもしかするとこの話と関係しているかもしれない。欧州での最後の一年は、安らぎのさなかにあって次の葛藤に向かっていくための準備をする期間なのだろう。米国に向かうことは新たな葛藤に向かうことである。そんなことを思う。

以前から日記で書き留めているように、私の魂の内在的な特性である「遍歴性」というのは、こうした精神生活における運動と密接に関係しているように思えて仕方ない。葛藤を求めて次の生活拠点に移るというのはおかしな話かもしれないが、私の魂は葛藤を通じた独自の運動を求めている。そしてそうした運動によって、魂はまた成熟の方向へと一歩を踏み出す。人間の魂はどこまでも深く変貌を遂げていくことを求めており、どこまでも運動を続けていくことを望んでいるかのようだ。

魂の絶え間ない変容衝動と絶え間ない運動衝動こそが、魂を永遠なるものにしている所以なのかもしれない。フローニンゲン：2018/2/8（木）07:20

No.737: Collective Pathology

My interest has recently leaned toward collective pathology──or organizational and social pathology. Of course, psychopathology can be applied to collective pathology, but I want to approach the issue not only from psychopathology but also from a different academic field.

One of the candidates would be system and network science in that both fields not only address the development of systems and networks but also the process of their collapses. I want to investigate collective pathology from inside and outside. The former would derive from the study of psychopathology, whereas the latter would stem from system and network science.

In parallel with my present academic and professional work, I'll start to learn the mechanism and process of collective pathology. Groningen, 08:02, Saturday, 2/10/2018

## 2109. 複数の実践領域の越境

今日は日本企業との協働プロジェクトに関する仕事を四つほど行った。いつもに比べてその数は随分多かったように思う。各ミーティングの事前事後に色々とやることがあったため、結局朝から晩まで協働プロジェクトに関する仕事を行っていた。夕方に仕事がひと段落し、空を眺めた時、今日もまた飛行機雲が空に存在の痕跡を残していた。

飛行機雲を生み出した飛行機自体の姿を確認することはできず、ただ飛行機雲だけがそこにあった。成層圏の冷たさが静かに滲み出しているような夕暮れ時の薄青空がそこに広がっていた。

そうした空をぼんやりと眺めていると、今この瞬間の冬が遥か遠くの何かに向かって伸びていくような感覚があった。「この冬」から「あの冬」への変容に関する展望がそこに開けていたと言えるかもしれない。

越冬の先にあるもの、それは単なる季節的な春ではない。何か自分に大きな影響をもたらすものがそこに待っているような気がしてならない。この予感はまさに、「今年はまた動きのある年になるだろう」という別の予感と密接につながっているように思う。私は自分でもよくわからないのだが、今年は大きな変化を再度経験するだろうと思っている。こうした思いに対する根拠はほとんど無い。だが、それは何か必然的なものとしてやってくるだろう。

先ほど夕食を摂り終えて、就寝までの時間にかけて取り組もうと思っていたことに取りかかろうとすると、作曲実践を始めて以降、自分がこれまで以上に複数の領域を日々の生活の中で行き来していることに気づいた。そこから、一日の中で実践活動に充てられる時間を12時間程度だとすると、それらの時間を三つか四つの領域の活動に割り当てていることに気づく。単純に計算すれば、一つの領域あたり三時間か四時間ほどの実践量となる。

今日は少しばかり例外であったが、大別すると、学術研究、日本企業との協働、作曲実践の三つは少なからず独立した領域として存在している。学術研究に関しては、発達科学の研究と教育科

学の研究という二つを分けることも可能であるし、それらを一つとして扱うことも可能である。ただし、こうした科学研究以外にも、哲学的な探究に従事することがあるため、やはり合計で少なくとも三つか四つの実践領域があることに気づく。

これまでの七年間は、とりわけ一つの専門領域を深めていくことに専念していたが、あるところまで来ると、そうした単一的な実践は限界を迎えることが分かり始めてきた。単一領域に特化するよりも、様々な領域を越境する形で複数領域の探究を同時並行的に進めているというのが今の自分の姿だろう。毎日従事していることがそれぞれかけ離れすぎているように自分でも思えることがあるが、逆にそうした状況が私の日々を充実したものにしてくれているように思える。

複数の領域を越境していく際に重要なのは、隣接領域間の移動ではなく、全くかけ離れた領域間を移動することにあるのかもしれない。領域が離れていればいるほど、意識のシフトを余儀なくされる。そうしたシフトは私の意識を非日常的なものに誘い(いざない)、各領域の実践活動を非日常的な意識の中で行いつづけるというような状態に今の私は置かれている。

意識状態の変化が意識の段階や実践活動そのものに多大な影響を与えることを考えると、全くかけ離れた領域の実践を日々三つか四つほど行っていくというのはあながち否定的なものではないだろう。むしろ私にとって、それは非常に肯定的な作用をもたらしている。今日もこれから就寝に向けて少しばかり作曲実践を行う。フローニンゲン:2018/2/8(木)19:43

No.738: In Dulcet Time

I often realize that I am in dulcet time. Immersing ourselves in the aesthetic aspect of time would be indispensable to living fully in our daily life. Groningen, 09:11, Saturday, 2/10/2018

## 2110. 身体を通じた学習

今日は昼食を摂り終え、午後一番のミーティングに向けて準備をする前に、生ゴミを自宅近くのゴミ捨て場に持って行った。その時にちょうど、私宛に届けられている郵便物を発見した。

バルトークの『ミクロコスモス』の楽譜がイギリスから届いた。自宅に戻り、ミーティングまであまり時間がなかったが、届けられた楽譜の中身をパラパラと眺めていた。すると、ミクロコスモスの作品一つ

一つは小さなものでありながらも、小さいものの中に宿る固有の光を感じた。作曲実践の観点からすると、こうした小さな作品と丁寧に向き合うことは、作曲技術に関して着実な進歩をもたらすのではないかと思った。

小作品であるがゆえに、一つ一つの作品の細かな点にまで着目し、それが作曲上の新たな発想と技術的進歩を促すように思えてくる。これから少しずつ、バルトークの『ミクロコスモス』にも範を求めるようにしたい。バルトークがまさに自身の中で音楽小宇宙を築き上げたのと同様に、いつか自分の内側にも小さな音楽宇宙を創り上げることができればと思う。

ここ最近の作曲実践を振り返ってみると、作曲理論の書籍を読む時間が減っていたように思う。何か隙間時間や、どこかに出かけた時の待ち時間に作曲理論のテキストを読むことはあっても、自宅の書斎でじっくりと腰を据えて作曲理論のテキストに目を通す時間はここ最近あまりない。

当然ながら理論は重要なのだが、そうした状況を生み出していた背景には、実践から学ぶことの方が遥かに多いということを身を持って体感していたことが挙げられるだろう。私の音楽理論に関する知識が少ないことにも原因があるだろうが、作曲家が執筆したテキストの字面だけを読んでいても、何かを理解したという感覚が得られることは乏しい。やはり実際の楽譜を自分なりに分析し、そこから一つ一つ新しい視点を学び、それを自分の曲の中で試すということが何よりも大きな学びになっているように思える。今後は作曲理論を学ぶことに関して、もう少し工夫が必要になると思われる。

作曲というのは本当に概念的に理解をすることは難しく、実際に手を動かすことが極めて重要であり、手を動かした結果として生み出されたものを音として自分の耳で聞くこともまたさらに重要である。学術探究の際には音を司る感覚をそれほど活用することはないため、この辺りにも作曲実践がもたらす感覚拡張という別の意義があるかもしれない。いずれにせよ、今後作曲理論のテキストを活用する際には、将棋やチェスの打ち手を実際に盤上に再現して学んでいくのと同じように、テキストに記載されている具体例を作曲ソフトに自ら打ち込み、それを再現していくことで作曲の感性を磨いていく必要があるだろう。

どのような学習においても、身体感覚をいかに伴わせて学びを進めていくかは重要であるが、作曲実践においてはとりわけそれが重要だろう。とにかく概念的な理解に留めず、むしろ作曲というもの

を概念的な理解に留めることは不可能であるということを念頭に置きながら、身体を通じた学習を心がけていく必要がある。フローニンゲン：2018/2/8（木）20:01

No.739: Doubt toward Arts

Although the possibility is quite miserable, is it possible to heal our society by arts? I've had some themes that I want to express as music. For instance, "pathological modern society," "chaotic capitalistic world," and so on. Yet, I'm still uncertain of how much arts encapsulate transformative power for our society…. Groningen, Afternoon, Saturday, 2/10/2018

## 2111. 研究インターン二日目の朝

研究インターン二日目の朝を迎えた。今朝は五時半に起床し、身体を温めるために、シャワーではなく湯船に浸かることにした。

これからインターンがある日の朝は浴槽に浸かり、身体を温めながら、一日の活動に向けて心身の状態をゆっくりと整えようと思う。湯船から上がり、書斎の窓から外の景色を眺めると、道路の轍以外の部分がうっすらと白くなっていた。雪と言うよりも霜が降りていたようだ。

今週は天気に恵まれていたのだが、今日は夕方から雪との予報だった。しかし、天気予報を今確認してみると、幸いにもなんとか天気が持つようだ。インターン先のオフィスに向かうときのみならず、自宅に帰ってくるときも天気が良いというのはとても有り難いことである。

本日のインターンで取り組むことを少しばかり事前に書き留めておく。オフィスに到着したらすぐに、隣の部屋にいるスーパーバイザーの一人のエスター・ボウマ博士に挨拶をし、今日のどの時間帯にデータの活用方法に関するミーティングを行うのかを確認しておきたい。

数日前に、データの閲覧・管理の権限を付与され、データにアクセスできるようになった。データの保存先などを少し教えてもらえれば、あとはこちらの方で分析をどんどん進めていくことができる。

ボウマ博士にミーティングの時間を確認したあとは、その隣の部屋にいるジャン・ディエナム博士にも挨拶を兼ねてインターンの進み具合を報告しておこうと思う。二人とも月曜日にはこちらのオフィ

スにおらず、別のオフィスにいるため、二人に会える金曜日に色々とコミュニケーションを取っておこうと思う。

二人への挨拶が済めば、二階のオフィスから一階に降りていき、そこでコーヒーを購入する。私が勤務しているビルにはコーヒーや紅茶を購入することができる場所がいくつかあるのだが、一階にあるコーヒーマシーンはとてもモダンな製品であり、コーヒー豆の選択から香りの選択まで細かな注文ができる。その分、他の場所で購入するコーヒーよりも割高だが、せっかくなのでこちらのオフィスで勤務する時にはこのコーヒーマシーンを利用する。コーヒーを購入し、自室に戻ったところで本日の研究を進めていく。

今日取り掛かることとしては、月曜日に作成したデータの定量化基準の一つを見直し、重複するキーワードを削除した完成版のリストを作成することが挙げられる。その後、もう一つの基準に関するリストを作成することに取り組む。

ボウマ博士とのミーティングがどの時間帯に入るかわからないが、二つのリストを作ることは午前中に終わるかもしれない。仮にリストが作成できれば、二つの定量化基準に関するRのプログラミングコードを書いておきたいと思う。これができれば、データ整理が終わった後にすぐに分析に取り掛かることができるだろう。まずは午前中のリスト作りに焦点を当てようと思う。フローニンゲン：2018/2/9（金）06:33

No.740: Twinkling Stars

Last week had a series of wonderful days on which I could see twinkling starts in the night sky. Yet, a black rain cloud is covering up all over the sky today. Even if today is like that, I don’t want to forget scintillating stars within myself. Groningen, 09:31, Sunday, 2/11/2018

## 2112. インターン二日目の始まり

今日の朝はとても穏やかな雰囲気を発している。普段は朝の光景を書斎から見ることが多いが、今日はインターン先のオフィスに向かう道中にそれを眺めている。

朝の穏やかな空気とほのかな太陽光が実に心地よい。確かに今朝はとても寒いのだが、オフィスに向かう最中の足取りはとても軽やかだった。30分ほど歩くというのはとても良いエクササイズのようであり、オフィスに近づくにつれて心身がますます活性化されてくるのを実感していた。

オフィスに向かう最中に、ふと早朝の作曲実践について振り返っていた。昨夜はフォーレの曲に範を求めていたのだが、今朝はバルトークの曲に範を求めていた。具体的には、バルトークが自分の子供のために作った『ミクロコスモス』を参考にしていた。

『ミクロコスモス』は合計で153曲から構成されており、最初の曲から徐々に難易度が上がっていく。今朝、最初の曲を眺め、そこから自分の内側に生じた感覚をもとに曲を作っていた。

最初の曲は本当にシンプル極まりないのだが、その中には光るものが含まれている。基本的にバルトークは自分の子供を含め、初心者のピアニストのためにこの一連の作品を作ったのだと思われるが、作曲の初心者にとっても非常に学びの多い教材である。

「全てのピアニストや作曲家はここから全てを始めるのだろう」という思いが湧いてきた。最初の数曲をつぶさに観察していると、バルトークの配慮や意図を曲の中に感じる。それを一つ一つ紐解きながら、それらを自分の学びに変え、作曲技術の向上を図りたいと思う。今夜もまたバルトークの曲を参考に曲を作ろうと思う。

そのようなことを考えながらオフィスに向かっていた。九時半前にオフィスに到着すると、まだそこには人が誰もいなかった。

パソコンを立ち上げ、仕事を開始するための準備をゆっくりと進めていると、エスター・ボウマ博士が姿を現した。私のオフィスにやってきて、今日のミーティングの時間について話し合った。

私:「今日のミーティングは何時からにしましょうか？」

ボウマ博士:「そうね、いつでも大丈夫よ。ただ、昼食前にエクササイズをするから、その前か後にしましょう」

私:「エクササイズ？ランニングか何かですか？」

ボウマ博士:「いやいや、ピラティスよ」

私:「おぉ、ピラティスですか！あぁ、ここから見えるあの大学のジムでですか？」

ボウマ博士:「そうよ！なのでピラティスから帰ってきて、ランチを取ってからはどうかしら？」

私:「ええ、そうしましょう。では二時からはどうでしょう？」

ボウマ博士:「じゃあ、二時からにしましょう」

そのようなやり取りをボウマ博士と行い、データの保存場所やデータの利用に関するミーティングを午後の二時から行うことになった。それまでは自分の研究に集中できるため、ここから一気にデータの定量化基準を完成させたいと思う。フローニンゲン:2018/2/9(金)10:05

No.741: “Art and Artist: Creative Urge and Personality Development (1989)”

Because my urge to explore art and human development arose, I purchased “Art and artist: Creative urge and personality development (1989).” It illustrates Otto Rank’s thoughts on art and humanity. I’ve been obsessively thinking about the relationship between artists and society or between art and society. Probably, I suppose that I want to discover a light to clear away my doubt toward the meaning and role of art in our society. Groningen, 11:43, Sunday, 2/11/2018

## 2113. 来週のインターンに向けて

フローニンゲン大学での研究インターンの二日目を終えた。初日に引き続き、今日も非常に充実した日であった。とりわけ、エスター・ボウマ博士と午後に行ったミーティングはとても有意義であり、私の研究に対して様々な観点から質問を投げかけてくださり、研究アイデアがより洗練されたように思う。研究アイデアがより練られただけではなく、将来的に複数の研究に派生しうる可能性が広がった。およそ一時間半ほどのミーティングのおかげで、このインターンの間に行う研究の焦点が明確になったように思う。

ボウマ博士とのミーティングをもとに洗練された研究仮説とその背景を、ジャン・ディエナム博士とMOOCチームのリーダーであるトム・スピッツ氏に共有した。今日は金曜日であり、一日の最後に彼らにメールを送ったため、彼らからのコメントは週明けになるだろう。

二人のフィードバックを受けて少しばかり研究の観点を修正するかもしれないが、来週からはデータの下準備に取り掛かる。まずは研究対象であるMOOCのレクチャーのトランスクリプトをエクセルに落とし込む。本日のボウマ博士とのミーティングの中で、csvファイルの場所を教えてもらい、それを確認したが、データのフォーマットがかなり乱れており、そのフォーマットを整えるよりも、レクチャーのトランスクリプトを一つ一つエクセルに移して行った方が作業時間が早いと予想された。そのため、来週に真っ先に取り掛かるのは、分析用のデータを準備することである。来週中にデータの下準備ができれば、あとは今日完成された定量化基準に基づいて、Rのプログラミングコードを書く。

ボウマ博士曰く、今のMOOCチームにRのプログラミングコードを書ける人間はほとんどいないそうであるから、このインターンで自分が書いたプログラミングコードは全て共有フォルダに残しておこうと思う。また、プログラミングコードのみならず、研究で用いるデータ、データ分析のプロセスを言語化したマニュアル、作成した分析レポートなども共有財産として残しておくつもりである。そうすれば、私がチームから離れた後も、今後誰かが自分の研究を参考にさらなる研究に着手してくれるかもしれない。

データの下準備は来週の金曜日に集中して行う。というのも、スピッツ氏から招待があり、月曜日は一日中、フローニンゲン大学が主催のMOOCに関するイベントに参加する予定だからだ。厳密には、月曜日の朝一番にスピッツ氏に付き添う形でMOOCの撮影現場を拝見し、昼食前に他のMOOCに関する開発ミーティングに参加する。その後、MOOCに関するイベントに顔を出す予定だ。科学的な観点からMOOCを探究するだけではなく、こうしたミーティングやイベントを通じて、実務的な観点、特にコンテンツ開発の観点からMOOCを知ることができるのは意義深い。来週のインターンもまた非常に楽しみである。フローニンゲン：2018/2/9（金）19:53

No.742: Collective Pathology

I’ve worked as an organizational consultant in the last seven years. My central focus has been to develop organizations. I’ve utilized my expertise──developmental psychology in particular adult

development theory──to facilitate individual and organizational development for a long time. I've recently been captivated by the process and mechanism of organizational pathology. More broadly, I'm interested in collective pathology.

The limitation of my previous work lies in my scant knowledge of collective pathology. In order to support individual and organizational development, the process and mechanism of collective pathology is indispensable. I'll begin to investigate this area. Groningen, 15:37, Sunday, 2/11/2018

## 2114. 週末の始まり

密度の濃い一週間が終わり、今日から休日に入った。平日という括りから休日という括りに変わったところで私の日々の過ごし方は何一つ変わらない。

今朝も六時過ぎに起床し、六時半から一日の活動を開始させた。昨夜は少々思考が興奮しており、すぐに寝付くことができなかったが、今朝の目覚めは良かった。昨日はインターンがあり、様々な刺激が自分の内側を活性化させていたために、少しばかり興奮状態にあったのかもしれない。一応インターン先のオフィスから自宅に戻ってきた後にも日記を書き留めておいたのだが、それでも思考の興奮状態は収まることがなかった。文章を執筆する量が不足していたのかもしれない。そうした姿を見るにつけ、私が日々に文章として形を残す量は圧倒的に不足していると痛感する。

昨日も少しばかり自らの表現物の量について内省をしていた。自分の内側には、一切枯渇することなく、絶えず生成され続ける何かが存在している。それは絶え間ない差異を創出する運動体であり、形として外側の世界に出てこようとする絶え間ない形象運動を繰り返す生き物であるかのようだ。そうした存在を認めながらも、まだその全てを表現する術を知らない。また、表現の量が圧倒的に不足していると痛感する。この世界に言葉や曲として自分の内側の現象を表現することについては、まだまだ考える必要のあることが山積みにされている。

今日から始まった休日について。休日は日本企業との協働プロジェクトの仕事は基本的に入っていないため、自分の探究に十分な時間を充てることができる。今日は旺盛に作曲実践に取り組みたい。早朝に、今日は久しぶりにショパンに範を求めて曲を作ろうと思う。その後、アーノルド・ショー

ンバーグの書籍の二読目を本日中に終えることができればと思う。いくつか読みたい作曲理論のテキストが書斎の中で積読状態になっており、ショーンバーグの書籍の再読が終わり次第、明日からでもそれらのテキストを読み進めていきたいと思う。

作曲に関しては、理論と実践の往復運動が比較的良い塩梅に行なわれている。理論書を読む量が少なく、実践が多いということは、私の特性上ちょうど良いと思っている。

作曲実践と作曲理論の学習の合間に、「デジタルラーニングと学習環境」のコースで取り上げられている課題論文を読み進めていきたい。今日はまず、“Practices of distributed intelligence and designs for education (1993)”と“Affordances: Clarifying and evolving a concept (2000)”を読んでいく。これらの論文を読んでみて、どれだけ時間が余るのかわからないが、もし仮に少し時間的に余裕があれば、福永武彦氏の小説を含め、何かしら和書に目を通しても良いかもしれない。フローニンゲン:2018/2/10(土)06:56

No.743: The Nature of My Lifework

As I compose small pieces of music everyday, I'll consider the possibility to publish a number of small articles for my academic work. I don't have to publish a dissertation-like article. Instead, it would be better for me to continue to publish as many short articles as possible. Each small work leads to the next work, whose process is endless until the end of my life. Continuity and succinctness are key to my lifework in music and academics. Groningen, 16:19, Sunday, 2/11/2018

## 2115. 精神病理学への関心の高まり

昨日、組織というものを考えるにあたって、どのような観点を採用してその探究を行うことに関心があるのか少し考えていた。いくつか色々な考えが浮かんできたが、まず明瞭な考えとして浮かんできたのは、経営学の組織論の観点から組織を考えるというのはあまりにもつまらなすぎるということだった。経営学を日本の大学の学部時代に専攻していたということが、こうした反発をもたらしているのかもしれないが、経営学の組織論の観点から組織を考えることだけはしたくない。そうなってくると、その他にどのような観点から組織というものを考えていくのが面白いのかを考えていた。

当然ながら、発達科学の枠組みから考えるというのは面白いことは面白いが、それは自分の既存の専門性の中に留まった探究であるがゆえに、あまり気乗りがしない。それよりもむしろ、集団心理の病理的側面を捉えていくような社会学的なアプローチの方が面白いのか、それとも個人を対象にした精神病理学を集団にまで拡張させていくことの方が面白いのかを考えていた。

最初に立てた問いに対して明瞭な回答など出なかったのであるが、とりあえずこれまで学んできた枠組みの中で組織について考えることだけは避けたいと自分が思っていることは確かなようだ。

生と死が対になっているように、発達と病理も対になっているがゆえに、精神病理学の集団への適用というのは関心がある。キャリアの最初に経営コンサルタントとして働いていた時期を除外すれば、日本企業との協働プロジェクトに従事し始めてかれこれ五年ほどになる。そこで掲げられている目的は、たいてい組織と個人のさらなる成長に関するものであった。だが、組織と個人の成長支援に関する仕事に従事し始めてからすぐに気づいたのは、成長を支援するよりも組織内の既存の病理を治癒することの方が先ではないか、ということだった。

組織と関わるときには大抵、文化的・制度的な病理が目につく。だが、これまでの私の専門性では、そうした病理に対して支援を行うのは難しい。当然ながら発達理論の考え方は、病理の治癒にも応用可能であるが、精神病理を扱う領域とはやはり異なるものなのである。日本の企業社会の様子を見ていると、成長支援よりも病理の治癒の方が先ではないかという思いが日増しに強くなる。

さらなる成長を遂げていくためには、組織も個人も、そもそも土台としての健全な精神が必要である。とりわけ組織においては、健全な文化と制度が必要になると思われるが、これまで携わってきた案件と現在の案件に思いを巡らせてみると、文化的・制度的な歪みが組織内に目立つ。このあたりの問題意識は最近特に強くなっている。発達支援の前に病理の治癒を支援する方が先なのかもしれない。

そのためには、現在の自分ではあまりにも土地勘がないと言わざるをえないだろう。精神がどのように発達していくのかのみならず、精神がどのように病んでいくのかを探究することが今の自分に突きつけられているように感じる。精神病理学の探究を始める時が喫緊の課題として迫っている。フローニンゲン：2018/2/10（土）07:51

No.744: Optimal Time Allocation

I'm engaging in various types of work in distinct domains; science, philosophy, music, and business consulting. The optimal time allocation might be three hours in each work. In a couple of years, the tendency of my work might continue, which is not negative but rather positive to let me interact with reality from diverse fields. Groningen, 18:16, Sunday, 2/11/2018

## 2116. 愚昧さへの憤怒

気づけば今日も一日が終わりに差し掛かっている。先ほど夕食を摂りながら、自国へ帰属することについて考えを巡らせていた。ある一人の人間が一国の国民であるということの意味ついて考えていた。当然ながらそれは法的な意味ではなく、実存的な意味においてである。

今日は早朝からしばらく自分の中に存在する攻撃性が顔を覗かせていた。それは特定の他者に向かうようなことはなく、この現代社会に向けられていた。

もしかするとその時の感情は苛立ちや憤怒といったものだったかもしれない。そうした感情の出所を探ろうとするたびに、いつもその試みは失敗する。私は一体何を要因としてこの現代社会に対して憤りを感じているのだろうか。

先ほど夕食を食べながら、例えば今から一万年後の人類が現在の人類を見て何を思うかを考えていた。頭の中で数人の人間が話し声を上げていた。

A:「知ってる？今から一万年前の人類は、「経営戦略」なんていう野蛮な言葉を使っていたらしいよ。その時代に存在していた「軍事」と呼ばれる領域の言葉なんだって」

B:「うん、知ってる。その他にも、一万年前の人間は、働くことによって精神を病んだり、働き過ぎで命を落とす人もいたらしい・・・。「働く」ということは本来より善く、より深く充実した毎日を生きるためにあったものだったはずなのに」

その後も、私は何人もの人間の声を聞いていた。今から一万年後の人間たちは、揃ってこの現代社会に生きる人間たちの愚かさと未成熟さを嘆いていた。

人類が集合規模で発達を遂げていくというのは、長大な時間を要することであり、正直なところ社会の問題の解決を集合規模での発達に委ねるというのは相当に愚かだ。集合規模での発達というのは、既存の大きな社会問題が克服された後にわずかばかり起こり得るようなものではないだろうか。集合規模での発達が先なのではない。発達を遂げたから問題が解決されるのではなく、問題が解決されたから発達という現象が後から付随的に起こるに過ぎない。

集合規模での発達をスローガンに掲げる人間たちの言説を見ていると、その無知さと軽薄さに呆れてくる。仮にもう少し人間発達や他の領域に関する観点があれば、そんなスローガンなど口に出せるはずがないのだ。

今朝の憤怒のような感情は、実は昨夜あたりから少しばかり顔を覗かせていた。その矛先は学術世界の人間に対して向けられていた。

昨夜は床に入ってから、随分と多くの攻撃的な思考を学術世界の人間に向けていた。学術世界に属する一人の人間として、おそらく私は自分の中の何かを粉砕したいのだと思う。

激しい心理的投影がその時に起こっていたのである。多くの言葉をここでは取り出さない。だが一つだけ取り上げるとするならば、「学術世界に属する多くの人間の知性の高さと人柄には大変感銘を受けることがある。一方で、どうして彼らはあれほどまでに愚昧なのだろうか」という言葉があった。この言葉は私の心理的投影の表れであり、おそらく自己の愚昧な側面を強く指摘するものだろう。自己の愚かさを受容する気は毛頭ない。その代わりに、どうすれば自己の愚鈍な側面を粉砕することができるだろうか。フローニンゲン：2018/2/10（土）20:03

No.745: Visited the MOOC Recording Site

I visited the recoding site for MOOCs today. So far, I had had knowledge on MOOCs from only academic articles and my experience to take MOOCs. By virtue of the observation today, I could expand background knowledge on MOOCs. The opportunity to see how recordings are done enabled me to think about MOOCs from the perspectives of contents developers. On the basis of this experience, I'll explore in detail the process of contents development.

Next Friday in the morning, I'll have a meeting with one of my supervisors. We will discuss the data again. After this meeting, I plan to format the data, which will take the whole day.
Groningen, 17:45, Monday, 2/12/2018

## 2117. 破壊と創造の輪廻

自分の中にはいつも自分に対して激しい態度を取る自分がいる。時々その声が聞こえ、その声に飲まれそうになる。昨夜の現象はおそらくその一つだろう。その自分は科学研究に従事する自分に対して強い否定的な声をぶつけてくる。

「科学研究？そんな無益なものに従事しているのか？科学に一体何ができるのか？」そのような声を昨日も今日も聞いた。

作曲実践に打ち込んでいる最中にも、「作曲？それは芸術の一つの領域だろうが、そもそも芸術に一体何ができるのか？」その声は、科学研究や作曲実践に取り組む自分を激しく否定する。その声が投げかける否定的な問いに対して、私はもしかすると明確な答えを述べることができないかもしれない。

科学や芸術の意義とは何だろうか？科学や芸術がこの社会に果たす役割とは何だろうか？

人類は歴史を通じて科学研究に精を出し続け、優れた芸術を世に残し続けている。だが、この現代社会の有り様はどうだろうか。

現代社会のこのような有り様を見ると、気が重たくなり、科学や芸術が無益だと述べる自分の内側の声に賛同したくなってしまう。科学や芸術に一体何ができるのだろうか。

本当のところ、それらの意義は一体何なのだろうか。「科学研究や作曲に従事することが無益であるなら、一体自分は何に従事すればいいのか？」と私は、自分の声に改めて問い返してみた。すると、その声は何も答えなかった・・・。

暗くて深い闇が辺りを覆っている。今日はあまり空を眺めなかった。

自己の存在の定位と社会との確固たる関係性の構築。自分の仕事が何なのかの再定義。それらをしなければ何も始まらないのだが、それらは一向に進まない。ある程度の答えは既に見出していたはずなのだ。だが、ここに来てそれらが雪崩のように崩れ去っていく。またそれらを見出す取り組みに従事しなければならないのか。

これまでの回答を超えたものを見出さなければ、自分の内側の声は黙っていないだろう。果たしてそれを今の自分に見出すことは可能なのだろうか。

人間の内側に備わる意味を生成する機能を逆向きに働かせ、意味を解体させる方向に活用したい気分がする。自分がこれまで一切疑ってみることのなかったことを全て疑い、全てを一度解体し尽くすという試みが魅力的に映る。

創造衝動と破壊衝動は本当に隣り合わせだったのだ。意味を創造することと意味を破壊すること。今、私は後者の方に魅惑されている。これまで築き上げてきた一つ一つの意味を解体し尽くすということは、それほど悪いことではないのかもしれない。結局のところ、それはいつかは通らなければならない道なのだ。自分が自分だと思っていたことも含め、全ての意味を一度完全に破壊することに乗り出してみたい。それは猟奇的に思えるかもしれないが、やはり今の自分にはそれが必要であるように思えるし、それをしなければここから先へと進めないような気がしている。

意味を生成し、生成された道の上を歩いてくことが人生であれば、生成された意味を破壊し、新たな道を築きながらその上を歩いてくこともまた人生だろう。この意味もまたすぐに壊して前に進まなければならないし、そう意味づけた自分自身もまた破壊して創造して次の瞬間に向かっていく。結局私たちは、この破壊と創造の輪廻から逃れることはできないのではないだろうか。フローニンゲン：2018/2/10（土）20:42

No.746: The Presentation Opportunity in the ICLS conference 2018

Today, I got happy news that my submission to the ICLS conference in London was accepted. Last week, I received the same kind of news that my paper was accepted for the 48th annual meeting of the Jean Piaget Society in Amsterdam. I'm fortunate to have two opportunities

to make a presentation in different communities. I expect to obtain beneficial feedback from the participants.

I originally submitted my paper to the short paper section, but the committee decided to let me present it in the poster section because there were a number of high-quality papers this year. Even though it is a poster presentation, the experience would be a significant step in my academic career. Groningen, 19:22, Monday, 2/12/2018

## 2118. 自己の精神性の未熟さと精神病理への関心

小鳥がピヨピヨと鳴く声が聞こえてくる。その鳴き声の伴奏であるかのように、小雨が窓を打つ音が聞こえてくる。今日の気温は比較的高い方だが、午後までは雨が降るようだ。

昨日は、自分の内側にある激しい塊のようなものと向き合っていたような気がしている。実際には、それと対峙することを余儀なくされていたのだが、今朝は少しばかり静かな気持ちに戻っている。昨夜も似たような自己の課題について考えを巡らせていたように思う。一つは自分の日本語の問題である。

自分が生み出す一つ一つの日本語の根幹装置のようなものの姿を捉え、その性質をつぶさに検証してみないと気が済まない自分がいるようだ。その背景には、自分の日本語のおかしさやその質に納得していない自分がいることがわかる。日本語のおかしさというのは形式上のものではなく、意味的なものである。

今、私が納得していないのは自分の日本語に含まれる精神性の質であり、言い換えるとそれは、精神の成熟度だと言える。自らの精神性が現れる自分の日本語に意味的な「おかしさ」が含まれる、と述べてしまったことがもはやおかしい。

発達の要諦である「含んで超える」という原理を考えるならば、現在の精神性をおかしなものとして捉えることは適切ではない。しかしそれを無意識に不適切なものとみなし、それを上記のような言葉として表現してしまった自分が確かにいるのである。そこに精神の未熟さを実感せざるをえない。このように、意味を内包する自分の言葉を一つ一つ見ていくと、自分の日本語には随分と納得のい

かない点が残るということ、そのことについて昨夜就寝前に考えていた。それと同時に、相変わらず日本語で意味を生成する絶対量についても思いを巡らせていた。「自分はあえてこの程度の分量しか書かないようにしているのか、それともこれくらいの分量しか書けないのか？」という二択の質問が脳裏をよぎった。

今考えてみると、それ以外にもいくつも選択肢があるはずなのだが、昨夜はその二択しか思い浮かばなかった。そして、それらはどちらも正しいように思える。日々、この程度の分量しか書かないようにしているのは確かであるし、同時にこれくらいの分量しか書けないというのも確かなように思えてくる。

結局まだ文章の執筆量は絶対的に欠落しているのだ。仮に日々の文章量がわずかであったとしても、これをまた一年、さらにまた一年と継続させていこうとする意思の姿を見ることはできる。それがせめてもの救いだろうか。

気づけば明日からまた月曜日を迎える。本当に日々が過ぎ去る速度は光のようである。

予定では今日は、今年の六月にロンドンで行われる国際学習科学学会の論文発表の審査の結果が通知されるはずである。応募者がかなりの数であったということもあり、審査が予定よりも随分と遅くなっているようだ。幸運にも自分の論文が受諾されれば、六月にロンドンに足を運びたいと思う。

休日の最後である今日は、昨日に引き続き、作曲実践に多くの時間を充てると共に、アーネスト・ベッカーの“Escape from evil (1975)”の続きを読み進める。人間の悪の側面、さらには集団の精神病理について考察する上で、本書は極めて重要な洞察を提示してくれる。人間精神の邪悪な側面と集合規模での精神病理への関心は今後しばらく続くだろう。フローニンゲン：2018/2/11（日）07:21

No.747: Alluring Place

I suppose that all of us have a different alluring place within us. It seems that I’m currently going to that kind of riveting place. Groningen, 20:47, Monday, 2/12/2018

## 2119. 交差

少しばかり残念な知らせが届いた。小中学校時代の最も仲の良かった友人が逮捕されたそうだ。

その理由について確認すると、殺人罪であったらしい。実は私もその現場にいて、その友人が別の双子の友人と揉めている姿を見ていた。

私は所用があり、その場を後にしたのだが、そこでのいざこざが過熱し、その友人は二人の双子の友人の頭を拳銃で打ち抜いたそうだ。それが彼が逮捕された理由である。

ある知り合いの家族がビルの屋上に立ち、そこで面白いものを見せてくれた。飼っている猫には好きな遊びがあるということなので、その遊びを見せてくれるとのことだった。

ビルの屋上に用意されていたのは、一つの大きな風船だった。なにやら、今から風船に付けられている長い紐に猫を括り付け、猫を空に向かって飛ばすとのことである。

その猫は嫌がる素振りを一切見せず、確かに風船に乗って空を漂うことが好きなのかもしれないと思った。その家族の奥さんが猫を紐につなぎ、ゆっくりと空に浮かべた。すると、風船がそっと宙に浮き、ゆっくりと猫は空の方に上昇していった。

私:「無事に浮かびましたね。でも、このまま空の方に上昇していくと戻ってこれなくなるんじゃないですか？」

知り合いの奥さん:「ええ、でも大丈夫です。うちの猫はここに必ず戻ってきますよ」

知り合いの奥さんがそのように述べると、猫が括られている風船は強風によって一気に遠くの方に飛ばされていった。見る見るうちに風船の大きさが小さくなり、猫はもう見えなくなった。

私:「本当に大丈夫ですか？あの風の強さだと別の国まで飛ばされてしまいますよ？」

知り合いの奥さん:「ええ、大丈夫ですよ」

© YOHEI KATO 2019

知り合いの奥さんは笑いながら答えた。しかし、私にはそれは笑えることではなく、猫が繋がれた風船は別の国まで飛ばされるというよりもむしろ、大気圏を超えていきそうな感じがしていたのだ。

私は猫の様子が心配だったので、そのビルの屋上から空に向かって飛んだ。風船が風に流されていった方角に向かってしばらく飛んでいると、眼下には無人島だらけの見知らぬ世界が広がっていた。

風船の姿を遠くの方に見つけた時、その風船はもう地面に着地しそうになっていた。風船が着地した瞬間、紐に括られていた猫は一目散にどこかに向かって走り始めた。

猫が走り出した方向は、知り合いの奥さんが述べていたように、本当にあの家族のところだということを私は理解した。猫の走る速度は、私が空を飛ぶ速度よりも早く、もはやその猫に追いついていくことはできなかった。その猫が無事であったということ、そしてその猫が本当にあの家族のところに帰っていく姿を確認することができて少しばかり安心した。

私は再び空に飛び立ち、無人島だらけの世界を眺めながら元いた世界に戻ることにした。

昨夜は上記のような二つの夢を見ていた。とても温厚だった友人が、双子の友人の頭を拳銃で打ち抜いたこという知らせを夢の中で受けた時は随分と驚いた。

昨夜の夢を思い返しながら書斎の窓の外を眺めると、どんよりとした雨雲が空全体を覆っているのが目に付いた。風がとても強いせいか、雨雲の動く速度も速い。夢の中で猫が飛ばされていた風の強さと同じぐらいの強さに思える。フローニンゲン：2018/2/11（日）07:21

No.748: Notes during Reading

I'll read some articles about digital learning today. While reading them, I'll take some notes.

To verbalize any thoughts and feelings arisen through reading is crucial for knowledge construction. I've forgotten the fact for a while. A small memo is a path to a gigantic knowledge edifice. Groningen, 08:28, Tuesday, 2/13/2018

## 2120. アーネスト・ベッカーの一連の書籍

天気予報の通り、早朝からの雨は昼食前に止んだ。まだ雨雲が空を覆っていることに変わりはないが、時折太陽が雨雲の隙間から顔を覗かせる。

昼食後、バルトークの『ミクロコスモス』のいくつかの曲を参考に、二曲ほど短い曲を作った。『ミクロコスモス』に収められている作品と最初から順番に向き合っているのだが、どの作品も教育的な配慮が十分になされている。バルトークの教育的配慮を知りながらも、自分がそれらの作品に範を求めようとすると、バルトークが込めた意図とは異なるものが出来上がってしまう。しかし、それは当然のことかもしれない。

作曲に関する技術的かつ理論的な力量の差以前に、そもそもバルトークと私は異なる人間であり、異なる表現者であるからだ。バルトークの曲に範を求める際は、できるだけ彼の教育的配慮を汲み取り、それを自分の作曲に活かす姿勢を忘れることなく、同時にバルトークとは異なる意図を込めた作品を作っていくようにする。今日は夜にもまた作曲実践を行う予定だが、その時にはバッハの曲に範を求めようと思う。

昼食後の作曲実践がひと段落したところで、昨日から読み進めていたアーネスト・ベッカーの“Escape from evil (1975)”という書籍の初読を終えた。数日前に集団の精神病理に対する関心が突如として高まった時に、本棚に本書があることを思い出していた。

振り返ってみると、集団の精神病理に対する関心は数日前に限ったことではなく、この数年間のうちに定期的にその関心が突如として高まる時がある。その都度、何かしらの書籍を購入していたが、中には全く手をつけていないものがあった。そのうちの一冊がベッカーが執筆した上記の書籍であった。本棚にはさらに、ベッカーの名著である“The denial of death (1973)”が眠っている。本書が名著であることを知りながらも、まだ一度も最初から最後まで目を通していない。そういえば、本書との出会いは以外と古く、今から五年前にアーバインに住んでいた時のことである。

今はアルコールをほとんど口にしないのだが、その当時は、週に一度だけワインを飲む習慣があった。だが、ワインを飲む際には、ルドルフ・シュタイナーが提唱したバイオダイナミクス農法で作られたワインしか飲まないようにしていた。偶然ながら近所にバイオダイナミクス農法で作られたワインが

購入できる場所があり、そこである日試飲をしていた時、一人の中年男性とカウンターで相席となった。その日は確かノートを忘れ、持参していた発達心理学の専門書に試飲したワインについての情報を書き込んでいた。すると、隣に座っているその中年男性から声をかけられ、そこから店が閉まるまで話をしていたことがある。その時に、その方に勧めてもらったのが、ベッカーの“The denial of death (1973)”であった。

この書籍を教えてもらった翌日に、本書を調べてみた。しかし、その時に購入する決断をすることはなく、しばらくの時間が経った。三年前に日本に一時帰国していた時に、集団の精神病理に対する関心が高まり、ふとベッカーの書籍を思い出し、その時に本書を購入したのである。

人との出会い、そして書物との出会いというのは本当に不思議だ。今手元にあるベッカーの書籍にはそのような思い出が梱包されている。

来週中に本書を最初から最後まで目を通したいと思う。フローニンゲン：2018/2/11（日）15:23

No.749: Voice from the Innermost Place of Being

I can sometimes hear a voice from the innermost place of my being. Such a voice is exactly our inner voice of truth, and it wells up from the essence of our being. Groningen, 10:37, Tuesday, 2/13/2018